

平成 31 年春彼岸法話

# 浄土への想い

正信寺 釋英和

平成三十一年三月二十一日 正信寺春彼岸 法話

## 浄土への想い

釋英和

### 【はつめい】

本日は、お忙しい中お繰り合わせいただき、お参りいただきまして、ありがとうございます。昨年は台風がたくさん上陸したり、猛暑だったりして、なかなか大変だったと記憶します。地球温暖化といわれて久しいですが、今年は、五月に元号も変わり、新たな気持ちで迎えたものです。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

本日は、浄土への想いについてお話しさせていただきたいと思えます。

### 【東日本大震災の被災地訪問】

私は、平日は会社員をしているのですが、勤務が五年、十年という区切りなりますと、リフレッシュ休暇という長期休暇をいただけることになっております。それを利用して、昨年末のクリスマスから三日間、三陸旅行をさせていただきました。それは、東日本大震災の被災地を巡る旅でした。

皆様は、スマホは持っていらっしやなくても、携帯電話は、ほとんどの方がお持ちだと思えます。昨年、ポケットベルのサービスが廃止になりましたが、通信機器というのは流行り廃りが早いものです。今から十年ほど前には、パーソナルハンディフォンシステム、頭文字をとって通称 PHS あるいはピッチとよばれる省電力で低価格な携帯電話がありました。

低価格が売り物のピッチでしたが、移動中に切れやすいというのが欠

点でした。その欠点を解消すべく、アンテナを町中に張り巡らし、利便性を向上させようという施策をワイコムという会社が行っていました。私は、そのアンテナと電話回線を接続する交換機を、NTTの電話局内に設置する仕事をしておりました。NTTの局舎は、日本全国にあります。読むのが難しい難読地名にもあり、打合せをするために読み方をたくさん覚えなければならなかったことも良い思い出です。

ちょうど、平成二十年、東日本大震災の三年前に全国で一八〇〇か所、青森県から岩手県、宮城県、福島県の東北地方におよそ二百セットの交換機の設置工事を行いました。

東日本震災の後、NTT 局舎の被災状況のホームページを見たところ、無残に津波によって倒壊している状況が乗っておりました。通常、コンピュータを収納する設備は、地味なクリーム色をしているのですが、ワイコム設備は、鮮やかな紺色をしていましたので、被災状況の写真の中でも、目立つ存在でした。設置してからたった三年で被災して倒れている設備をとっても残念な気持ちで見たと記憶があります。

今から二十三年前の神戸淡路大震災の時には、私が設計した製品を納入していた、川崎重工、三菱重工の神戸工場のお客様に、震災から一か月後に、お見舞いに行くように上司に言われました。その時、がれきの山の永田地区や橋脚が折れて倒壊した阪神高速を見てきました。この時の衝撃やそこでお亡くなりになった方の事、残されたご家族のことを思った経験から、被災した三陸海岸にも、現地を訪問して、そこで何かを感じたいと思っていました。

余談ですが、会社で出張というビジネスホテルに泊まるのですが、神戸淡路震災の一か月後では、どこも営業していなかったのですが、唯一メリケン波止場の近くのホテルオークラ神戸が営業していて、泊まる

ことができました。一泊二万六千円の宿泊料が、半額だったので上層部の OK がでたことを思い出します。当時、メリケン波止場も大きな地割れがあり、海のそばには近づけませんでした。しかしながら、出張当日は天気も良く、海がとてきれいだっただのが皮肉な感じがしました。

日本の名ホテル、オークラもガスが出なかつたのでレストランは休業していました。高級ホテルに宿泊したのに、仕方なく朝ごはんはコンビニエンスストアでサンドイッチを買って食べました。

### 【浄土ヶ浜と地獄のようだった三陸】

神戸の海が、震災を感じさせないほど、穏やかできれいだったと申し上げましたが、宮古の浄土ヶ浜も、名前の通り心が洗われるような風光明媚な景色が広がっていました。断崖に囲まれた景色が広がり、海が澄んでいて、ザツパ船という小さな漁船が昆布をとっていました。のどかな漁村という雰囲気もある和やかな場所でした。

宮古駅の近くのビジネスホテルに宿泊し、近くの「まとい鮎」で三陸の魚とお酒をいただきました。このお寿司屋さんは、川の岸壁からは三百メートル程度離れ、海からは一キロほど離れているところに立地しているのですが、大震災当日には、天井まで津波が来たそうです。それでも、内陸なので倒壊は免れ、現在も営業しています。地図で見てもわかる通り、浄土ヶ浜とは二キロも離れていないところですよ。しかしながら、津波による泥が大量に店内に流れ込み、まさに、地獄のような感じがしたそうです。

まとい鮎での夕食の後は、近くの飲み屋さんにも伺いました。飲み屋さんを経営している「あや」さんという女性は、年齢が七十歳くらいで、ご主人を二十年ほど前に亡くされ、お店から八キロ先に家庭菜園をしながら住んでいるそうです。震災時にはガソリンスタンドに三時間並んでも十リットルしかガソリンを買うことができなくて、お店の復旧のため

の往復に徒歩で通わなければならなかつたと話してくれました。こうした被災地の復興も、ボランティアの方が力を貸してくれたと、話してくれました。

### 【奇跡の一本松で感じたこと】

気仙沼の少々北にある陸前高田に残る奇跡の一本松にも行ってきました。陸前高田も、津波の跡地は、広大な更地が広がっていました。夕暮れ迫るころに吹き抜ける風は冷たく、そういえば、平成二十三年三月十一日も関東でも雪が降りそうな寒さだったなあと思ひ出しました。電車が止まっていたので、東京から鎌倉まで、寒い中歩いて帰った記憶がよみがえりました。運動靴でフルマラソンを走るより、革靴で四十キロ歩方がきついと感じたことも思い出しました。

奇跡の一本松の周辺には、まだ、被災して崩壊したままの漁業協同組合の鉄筋コンクリート造のビルがありました。防潮堤の工事がかなり進んでいましたが、そのビルを津波が乗り越えてくる様子をイメージすることができました。津波に飲み込まれている様子を想像すると、冷たいという感覚ではなく、奈落に引き込まれるような恐怖があつたのではないかと感じました。

また、一瞬にして家族、親戚、友人を失った人は、何を感じたか想像してみました。

それは、何とかして、もう一度会いたいという切なる気持ちになるのではないかと思います。それは、あの世であっても、だと思ひます。

### 【浄土という場所】

お葬式で、故人を偲んで、「また、あの世で会いましょう」というような別れの言葉を使うことがあると思ひます。たぶん、極楽浄土で再会できると感じている日本人は多いと思ひます。

キリスト教も、亡くなったら神の国に行くので、同じ場所で永遠の命を得るといのが教義になっています。

さて、仏教徒はみな、あの世で会えるのでしょうか。

日本の仏教の死後の世界の考え方は、中国の道教の影響を受け、亡くなって七日ごとに審判を受けることになっています。それぞれ秦広王(初七日)・初江王(十四日)・宋帝王(二十一日)・五官王(二十八日)・閻魔王(三十五日)・變成王(四十二日)・泰山王(四十九日)の順番です。そして、前世や生前の行いを審判された後、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六道に輪廻するといわれています。

ということは、あの世で会うというのは、この世の行いによって、輪廻転生で生まれ変わる先が六道あることを考えると、また会うことは簡単ではないということになります。

「あるいは一日、あるいは二日・・・あるいは七日、一心不乱に念仏すれば、臨終のときに、阿弥陀仏が多く菩薩とともに現れて、極楽浄土に生まれさせてくださる」と説かれています。

すなわち、浄土真宗の場合には、名号、「南無阿弥陀仏」を唱え、阿弥陀如来が、臨終のときに来迎して掬い取ってくれると信じています。ですから、浄土真宗門徒であれば、あの世で必ず会えると思えることができるのだと思います。奇跡の一本松の前で、私の実家の、ここ正信寺が浄土真宗で良かったと、しみじみ感じました。

### 【末法思想と浄土往生】

末法思想とは、お釈迦様が説いた正しい教えが世で行われ修行して悟る人がいる時代(正法)が過ぎると、次に教えが行われても外見だけが

修行者に似るだけで悟る人がいない時代(像法)が来て、その次には人も世も最悪となり正法がまったく行われない時代(法滅Ⅱ末法)が来る、とする歴史観のことです。

浄土宗、浄土真宗が生まれる前、平安時代は、武士が台頭して日本全国で戦がありました。また、養和の飢饉では、餓死者が街にあふれ、埋葬されない死者が腐臭を放っていたといわれています。鴨長明の「方丈記」にも悲惨な状況が記されています。困窮を極めた人々は、寺院や仏像を壊して薪にしたといわれています。

鎌倉時代は、源頼朝が落馬の末死に至り、子孫も早々に病死して、源氏が滅亡、その後の京の都は、承久の乱がおこりました。承久の乱は、後鳥羽上皇が、鎌倉幕府執権北条義時を討伐しようとして敗れた戦いです。その結果、法然上人、親鸞聖人を流罪にした、後鳥羽上皇が隠岐に島流しになります。因果応報といえる状況となります。

日常生活とは違い、生と死が入り乱れ、政治も混乱し、悲惨な状況が現れたという意味では、平安末期と東日本大震災は似ている状況が起こったのではないのでしょうか。どちらも、その場に立ち会った人は、末法の世界がこの世に広がったと感じたのではないかと思います。

末法の世界では、浄土に生まれたいと切実に想うことは、自然な流れだと思えます。

### 【清沢満之の世界】

さて、話が変わりますが、本日は、浄土についてお話するにあたり、江戸末期から明治にかけて生きた清沢満之という方をご紹介します。

明治時代の日本では、文明開化で西洋から哲学の思想が入ってきました。教学を重んじてきた仏教界も哲学の洗礼をうけます。

清沢満之は、幕末に尾張藩士の息子として生まれ、明治時代になって

英語学校、医学校に学びましたが、いずれも動乱の時代に廃校になってしまいました。真宗大谷派の僧侶になり、東本願寺育英教校に入学します。旧態依然の宗門改革を目指しますが、逆に本願寺から留学生として東京大学に派遣されてしまいます。清沢満之は、東大にできたばかりの哲学科を首席で卒業し、東洋大学の前身の哲学館で心理学及び哲学史を教えました。

真宗大谷派の委嘱で、京都府尋常中学校の校長を務めました。辞任し、塩を絶ち、煮炊きをしないでそば粉を水に溶いて食べるだけという禁欲的な生活をしました。これは、本山の僧侶に対してあるべき姿を示したのではないかと言われています。禁欲的な生活を続ける一方、哲学、宗教の学問は精力的に続けましたが、最後は、肺結核を発病し三十九歳で他界しました。精神界という雑誌を創刊したり、浩々洞という名前の共同生活をしながら勉強する同人を結社したりして、多くの人に影響を与えました。

清沢満之の活動が認められたのは、実は戦後になってからで、一九六五年春「中央公論」四月号座談会「近代日本を創った宗教人百人を選ぶ」で司馬遼太郎が取り上げたことに端を発します。また、一九七〇年十一月中央公論社『日本の名著』第四十三巻で著書を紹介され、人々に「清沢満之って誰だ」といわれました。それまでは、無名の人でした。

現在は、様々な功績が認められていますが、私は清沢満之の姿勢として評価したいのは、哲学を日常使う言葉で説明しようとしたことを第一番にあげたいと思います。信念や信仰を平易な言葉で説明しました。

清沢満之は沢山の示唆に富む言葉を残していますが、一番私の心に残ったことは、「道徳と宗教は違う」ということです。

自分を含め生きとし生けるものの幸福を求める点では、道徳と宗教は似ています。困った人を助けなければいけない、例えば、大震災で被災

している人を助けなければならないというのは、道徳です。しかし、全ての人が道徳を守るわけではありません。ボランティアに行きたいと思っても、体力の問題や自分の仕事上の責任を果たすために、ボランティアにいけない人はいます。

その忸怩たる思いを、救ってくれるのは、被災した人の復興を祈ることであり、自分の無力なことを、自分を超越した絶対他力にするという宗教なのではないでしょうか。

### 【信ずるが故に真なり】

清沢満之の言葉に、「実なるがゆえに信ずるにあらず、信ずるが故に実なり」というものもあります。「宗教は主観的事実なり」という文章の中に書かれているのですが、神仏が存在しているから信じるのではない、信じるから神仏がいるといえます。

理系の大学を卒業した私にとって、この内容は、衝撃的でした。というのは、浄土や阿弥陀仏については、本願寺学園で教師の資格を取得した時に教義を習い、経典にも書かれていることを知っていますが、それをもって、私は他の人に存在することを証明することはできません。また、具体的、客観的に何がすごい説明できないこともあり、僧侶としての沽券にかかわるといふか、心持が悪いと感じていました。

東大哲学科で西洋哲学に出会い、デカルトの「われ思う、故に我あり」という言葉から影響されているのだと、(どこにも書いていないのですが)私は思います。つまり、私たちが見えているものは幻で、聞こえているものは幻聴なのかもしれないという仮説に対して、自分の存在を考えている自分がいることは、誰も否定できないので、自分は存在していることが立証できるということです。

私は、清沢満之の言葉を、浄土を信じるのが、浄土の存在を事実化する、浄土があるということを示すことだと理解しました。つまり、極

樂浄土があるから、そこで会いたいと思うのではなく、極樂浄土があることを信じるので、また会えると思うことが、清沢満之の考え方なのだと思います。

【おわりに】

法然上人開祖の浄土宗は、念仏と信心は表裏一体をなすもので、念仏がなければ信心もないし、信心がなければ念仏も出てこないと考えています。

浄土真宗は、信の一念こそ重要と考えています。極樂浄土に往生したければ、阿弥陀如来を信じ、浄土の存在を信じることを、念仏に込めることが大切なのだと思います。ただし、この考えに至るのは、全て、他力のなせることと感ずることだと思います。

被災地に行ってみて、震災の遺族に心を致したこと、共感したことは、私が僧侶として生きていく一つのターニングポイントになるような気がいたしました。阿弥陀如来を二心なく信じること、極樂浄土に往生することを願うこと、それ以前に、阿弥陀如来の存在を信じ、極樂浄土があることを信ずることが、私の僧侶としての始まりなのだと思います。

本日は、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

淨土真宗

安養山 正信寺